

# イカとクジラ

2006(平成18)年11月20日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)



監督・脚本＝ノア・バームバック／出演＝ジェフ・ダニエルズ／ローラ・リニー／ジェス・アイゼンバーグ／オーウェン・クライン／ウィリアム・ボールドウィン／アンナ・パキン／ヘイリー・ファイファー (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／81分)

……タイトルからは何の映画かサッパリわからないが、これは監督の体験談を元にした、小説家のパパとママの離婚を契機とする家族の崩壊と再生の物語。共同監護とされた2人の男の子は、一見まともそうだがやはりヘン……。そして、両親もかなりインテリだがやはりヘン……。しかしそんな中でも、少しずつ子供は成長していくもの。さまざまな体験を経た2人の息子の再生と両親の再生は……？ 家族の絆が崩壊している今の日本でも大いに参考とすべき映画だが、語られるネタがすべてアメリカ的でわかりにくいのが難点。できれば、誰かが日本版の『イカとクジラ』を誕生させてほしいものだが……。

## タイトルの意味は……？

この映画はタイトルだけ読んでも何の映画かサッパリわからず、一瞬日本映画かと思ってしまうが、原題も同じ『The Squid and the Whale』。そこで、プレスシートをみると「ある日突然、パパとママは“他人”になった」「離婚した両親に振り回される兄と弟」と書かれており、この映画はバラバラ家族、不完全家族の物語……。

またこの映画の脚本は2006年アカデミー賞脚本賞にノミネートされたが、その内容はノア・バームバック監督の自叙伝的物語らしい。

すなわち、1969年ニューヨークのブルックリンで生まれた監督の父は作家で映

画評論家のジョナサン・バームバック、母はヴィレッジ・ヴォイスの評論家ジョージア・ブラウンとのこと。そして種明かしをすれば『イカとクジラ』とは、この映画の舞台となったニューヨークのアメリカ自然史博物館に飾られているダイオウイカとマッコウクジラのこと。

世界最大のイカといわれるダイオウイカは、それをエサとして襲ってくるマッコウクジラに対して触手を巻きつけ必死に闘うらしく、深海におけるその壮絶な闘いぶりが展示されているらしい。それだけ聞いてもまだ「だからナニ……？」と思ってしまうが、子供心にその姿はとても怖くて、指の間からしか見ることができないらしい。監督自身も「無理に近づいては、自分をいじめて楽しんでいるようなところがあった」とのこと。

しかし、そんな子供も成長して大人になれば……。そんなテーマがこのタイトルに込められているわけだ。

## 問題の発端は両親の離婚から

この映画は、父バーナード（ジェフ・ダニエルズ）、母ジョーン（ローラ・リニー）と16歳の長男ウォルト（ジェス・アイゼンバーグ）、12歳の次男フランク（オーウェン・クライン）という4人家族の崩壊と再生を描く物語。

4人家族が住むニューヨーク、ブルックリンのパークスロープは、ノア・バームバック監督が1980年代に少年時代を過ごしたところで、プロスペクトパークの西側にある閑静な住宅地で、かつては多くの作家が住む街として知られていたとのこと。

時は1986年。今夜はバークマン家の家族会議。そのテーマは、バーナードとジョーンの離婚。バーナードの提案は、①バーナードが公園の反対側に新しい家を借り、②2人の子供は共同監護とし、③火水土と隔週の木曜がバーナードの家、それ以外はジョーンの家で平等に監護するというもの。

子供たちはいきなりそんなことを言われて戸惑ったが、両親の決意は固く、受け入れざるをえないことに……。しかして、この映画が描く最大のテーマは共同監護のあり方。それは一見合理的な提案のようだが、さてその運用の実態は……？

## パパ派 vs. ママ派……？

バーナードはかつては有名な作家だったらしいが、彼の「文学」は難解すぎるため最近では出版計画が容易に進まず、大学で講義をしているのは生活のため。ところが、ジョーンは最近新人作家として『ニューヨーカー』誌上にデビューしようとしていたから、バーナードはそのためにイライラ。すると、それも離婚の1つの原因……？

バーナードは決して家族に思いやりのない人物ではないが、頑固で尊大なためか、なぜか空回りしているよう。もっとも、離婚協議が整った後、ジョーンが浮気していたことが判明したから、ホントはジョーンの方が悪い……？

バーナードは、文学に興味を持つ長男ウォルトはその方面に進めたいが、本や映画に関心のない次男のフランクはテニスの道に進めたい様子。そして、テニスのコーチであるアイヴァン（ウィリアム・ボールドウィン）はバーナードに言わせれば俗物だが、フランクは気に入っている様子。

そんなバークマン家はテニスの試合をしても、パパ派（父親＋長男）vs. ママ派（母親＋次男）の構図になるようで、これではケンカのためにテニスをしているようなもの……？

## 良くも悪くもアメリカ的 その1

この映画はノア・バームバック監督が自分の体験を元に脚本を書き、監督したもので、特に日本人向けに気を遣っているわけではないから、タイトルの『イカとクジラ』の話からして日本人には全くわからないもの……？

またバーナードもジョーンも作家だから、物語中に出てくる会話には小説や映画のネタがいっぱいだが、その中でわかるのは、せいぜいディケンズやカフカ、そしてテニスのマッケンローやボルグぐらいで、他は多くの日本人にはなじみのないものばかり。

会話の流れから、何となく小説の話、映画の話、音楽の話ということはわかるが、その本来の姿を知らない日本人はかなりイライラしてくることに……。その意味で、この映画は良くも悪くもアメリカ的……？

## 良くも悪くもアメリカ的 その2

次にアメリカでは、大人の生活と子供の生活は別々だし、個人のプライバシーがはっきりしているが、いくら家族であってもそれがこの映画ではきわめて顕著。それは、家族会議の席でジョーンが「離婚は夫婦の問題だ」と断定し、子供の監護の件だけで子供たちの同意を求めている姿にもハッキリと……。

また共同監護の合意が成立すると、2人とも、子供を監護していない日は大人の日とばかり、ジョーンは男を家に引き入れるし、バーナードも教え子のリリー（アンナ・パキン）を同居させるなど、この両親は少しヘン……？ また、ジョーンの浮気やセックスライフについての会話もかなり開けっ広げ……。

良くも悪くもこれがアメリカ的なのだろうが、これは多感な少年たちに悪影響を及ぼすのでは……？

## パパ派はパパ派なりの問題を……

文学好きの長男ウォルトはパパ派で、バーナードを尊敬しているようだが、同級生の女の子ソフィー（ヘイリー・ファイファー）に、カフカの作品を「カフカのだね」と語って聞かせている姿を見ると、ちょっと怪しげ……。さらに、学園祭のコンテストで弾き語りをした自作の曲は、優勝後わかったところでは、100%ピンク・フロイドの『Hey You』のパクリだった……。

ウォルトを演ずるジェス・アイゼンバーグは結構ハンサムな顔立ちで、しゃべり方も一見論理的だが、そんな行動をとるウォルトは実は心の中に大きな悩みを抱えていたよう……。

## ママ派はママ派なりの問題を……

他方、12歳のフランクを演じたオーウェン・クラインは、俳優のケヴィン・クラインとフィービー・ケイツを両親に持つ子供だが、この映画のオーディションを受けて晴れて合格した結果映画デビューしたとのことで、かなりの演技派……？ ところで彼が演じる弟フランクも兄に負けずかなりの問題児。そしてフランクの場合は、セックスライフを赤裸々に語るママに似て（？）、その方面の

バランス感覚が多少狂っているのか、自慰行為によってさまざまな問題を……。しかも12歳のガキのくせに、親に隠れて缶ビールを飲んでいることが明らか……。これは何らかの欲求不満の表れだろうが、こんな子供の心の病は基本的に親の責任……。

## 日本における家族の崩壊はアメリカ以上……

この映画は2006年アカデミー賞脚本賞ノミネートをはじめ、2006年ゴールデン・グローブ賞ミュージカル・コメディ部門最優秀作品賞、最優秀主演男優賞、最優秀女優賞ノミネート、サンダンス映画祭監督賞、脚本賞等、『『驚異的才能の出現』と全米が大絶賛!』と評価されているが、それはアメリカにおける家族の崩壊と再生の問題点が実に面白く描かれているため。

しかし、この映画のストーリーの中で使われるネタはすべてアメリカ的であるため、日本人にはわかりにくいのが難点。両親の離婚が2人の男の子に及ぼす影響という視点でいえば、それは日米共通の問題だし、共同監護の良し悪しだって共に考えるべき問題点。

ところが、残念ながら、この映画を観た日本人は一体この映画が何を言いたいのかがわかりにくいのでは……？

そこで私がお願いしたいのは、家族の崩壊がアメリカ以上に進んでいる今の日本において、早く誰かが日本版の『イカとクジラ』をつくってほしいということ。そうすれば、日米共通で同じ問題点を、より深く掘り下げて検討できると思うのだが……。

2006(平成18)年11月21日記